

パレスチナ赤新月社医療支援事業

大阪赤十字病院泌尿器科 医師 光森 健二

(派遣期間:2022年6月20日~9月30日:リモート支援期間含む)

今回第二期パレスチナ赤新月社医療支援事業の医療要員としてレバノン国に派遣されました。

I 事業概要

日本赤十字社(日赤)は、2015年より中東支援3カ年計画を策定して中東地域への重点支援を行いました。医療支援事業についてはパレスチナ赤新月社(以下 PRCS)が運営する病院の救急部門への支援を中心にニーズがあることがわかり、2018年からレバノン国内5か所、ガザ2か所の病院に対して支援を開始しましたが、2020年3月にCOVID-19のパンデミックにより日赤要員の派遣は中断されました。

今回第二期事業として職員の派遣が再開し、第1期で介入できなかった北部のサファッド病院、シリア寄りにあるナスラ病院と、途中で終わった南部のバルサム病院で事業を行うこととなりました。

2022年4月からサファッド病院へ医師1名、看護師2名を派遣して、第1期と同じ救急外来での診療強化と看護能力向上のために以下の項目を目標として1年半の計画がたてられました。

1. 医療の質の標準化
2. コロナ対策
3. 多数傷病者対応プランの作成
4. 救急外来での診断能力の向上
5. 看護の質の向上

II 今回の派遣について

4月から姫路赤十字病院の津田 香都看護師、福岡赤十字病院の前澤 由美看護師が派遣されました。このとき医師も同時に派遣される予定でしたが派遣者の都合にて中止となり、看護師2名で事業が再開されました。

私は6月20日から9月30日までの派遣期間のうち8月4日から9月15日まで現地派遣、その他の期間はリモートで支援しました。

今回の派遣で私のおもな任務は、現地の一般医への救急外来でのエコーによる診断技術指導と、多数傷病者対応のチームの編成、急変患者対応プラン(Code Blue)クリニカルパス導入に向けた準備のサポートなどを行いました。また帰国前に第一期事業で同様の支援していたハイファ病院を訪問し、エコー機器の使用状況確認、エコー診断に関する講義を行いました。

派遣期間中にエコーの技術指導は、まず救急外来に設置する小型のエコー機器を日本赤十字社から病院へ贈呈し、その後主に救急外来で必要なエコー知識に関する講義を4回(多くの医師が参加できるよう同じ講義を2回、計8回の講義)を行いました。講義の資料は事前に配布し、講義の前後で簡単な試験を行いました。講義の後には私の体を使って実技指導を行い、腎臓や胆のうをエコーで観察する練習を行ってもらいました。1か月余りでは自立に至るほどの指導はできませんでしたが、現地専門医に今後の指導を依頼する方向で調整をし、帰国後も現地要員の協力でフォローしていく予定としています。

またその他のスタッフが取り組んでいる救急外来での新しい診療記録用紙の導入(そもそもカルテに診療経過を記録することができていなかった)や救急外来でのトリアージ導入(より重症な患者さんを優先して診察できるよう患者さんの重症度を来院時に把握する)についても現地職員との会議に参加したり、個別に医師への説明などを行いました。

また手術室での安全を目的とした WHO Surgical Safety Checklist 導入も行われていましたが、現地の人にて実際に行われているかのモニタリングや現地外科医への説明や働きかけの手助けも行っています。

その他看護技術の講義やクリニカルパス(治療の標準化のための統一された治療・看護手順)作成の補助も行いました。

私が現地入りする前には政府への抗議活動やパレスチナ赤新月社内部のごたごたで思うように事業がすすめられませんでした。私の在任期間中には事業が中断するような大きな問題は起こりませんでした。それでもエコーの講義を依頼していた放射線科医が待遇面の不満で突然辞職したり、コードブルーやクリニカルパスについて相談していた医師が急に役職を退いたりで対応を迫られることがありました。幸い、いずれも現地病院が後任の医師をすぐ雇用したり、交代した医師が前任医師の方針を大きく変更せず、事業の継続が可能でした。

”広報なき活動なし”という大阪救援部の方針に沿い任期中に大阪救援部 SNS に3回の記事を投稿しました。エコーなどの機器贈呈のセレモニーは PRCS の SNS でも取り上げられました。また派遣前に某視聴者投稿番組へ応募して取材を取りつけました。

今回パレスチナ難民の方々とは仕事をする機会を得て、改めて彼らがおかれた理不尽な立場とそれを解決することのできない国際関係の複雑さを知りました。

また現地のパレスチナ人医師は生活のため複数の病院を掛け持ちで働く必要があるなど生活に疲れていて忙しくて講義に参加するのは難しいという人もいました。しかし新しい知識を身につけたい気持ちはあり、講義に参加してくれた時はいろいろ質問したり嬉しそうにエコーで検査を行ってくれました。

少しでも彼らの事情を理解しつつ今後もトレーニングの体制を維持して救急外来での診断に役立つよう現地に滞在する要員と協力していくつもりです。

最後にコロナの対応なども含め多忙な中長期の派遣中代診など協力してくれた泌尿器科スタッフや、担当医不在で不安やご不便にもかかわらずご理解いただいた患者様に心から感謝いたします。



派遣されたサファッド病院へのエコーなど診療機器の贈呈式



エコーの実技指導



現地病院スタッフとの会議